



我が家は昔旅籠であった 道中日記と定宿帳よりみる朝日屋藤助



飯田 良樹

『雲出川』第24号に「わが家は江戸時代に旅籠であった」を載せていただいてから10年が経ちました。

わが家朝日屋藤助の宿名が載せられた道中日記と定宿帳をその後も収集し続けてきましたが、この辺でもう一度まとめようと思います。

1) 何故屋号が朝日屋藤助なのか

朝日屋と名乗ったのは集落の東端に位置しているので朝日が拝める意味で付けられたと祖母に聞きました。当時、わが家より東には集落がなかったのです。

朝日屋という屋号は他所にも存在するので、区別する意味で屋号の後に藤助という名前を付けています。

わが家の過去帳の当主名をみると、藤助という名前が3代続いています。久居ふるさと文学館が所蔵している信藤家文書の人別宗旨御改帳にも天保11(1840)年、安政2(1855)年と明治4(1871)年の3回に藤助と記載がありました。このことより3代続けて朝日屋藤助を世襲して旅籠を営業していたと思われます。(過去帳と人別宗旨御改帳は天保時代以前の物は無かった)

2) 朝日屋藤助が掲載されている道中日記

題名 ()は出発地	年号	宿泊旅籠名
1. 上方・金比羅参詣覚書 (茨城県稲敷市江戸崎)	文化時代 (1810頃)	大和屋与平(松坂)→旭屋藤助(はだ・昼食、50文)→大和屋孫左衛門(貝戸)
2. 紅梅軒国遊記 (三重県員弁)	天保十年 (1839)	大和屋与兵衛(松坂)→朝日屋藤助(八太・昼食?)→大和屋孫左衛門(垣内)
3. 伊勢参宮道中記 (山形?)	嘉永五年 (1852)	三日市大夫(山田)→旭や藤助(はた、宿泊125文)→小竹や彦兵衛(名張)

4. 道中控 (群馬県沼田)	安政四年 (1858)	おづや喜右衛門(六軒)→朝日屋藤助(幡、宿泊150文)→大和屋半左衛門(いせじ)雨で進まず
5. 伊勢参宮控帳 (香川県三豊郡財田町)	安政六年 (1860)	もみじ屋半治兵衛(笠間)→朝日屋藤助(はた、宿泊)→橋村大夫(伊勢)
6. 道中巡行日録簿 (千葉県上総)	明治八年 (1875)	紅葉屋武左衛門(伊勢地)→朝日屋藤助(畑、宿泊8錢)→相川屋権六(山田)

1. 私が収集した限りでは、川崎吉男編著『伊勢参宮日記考』(筑波書林)の中にある「上方・金比羅参詣覚書」茨城県稲敷市江戸崎より伊勢・上方・金比羅を旅した記録が朝日屋藤助を記載された一番古い道中日記で天保より古く文化時代(1810年頃)のものです。

内容は2月1日に江戸崎を8人で出発、江戸・箱根・秋葉山・佐屋(愛知県愛西市)より船で桑名・津・21日夕方伊勢の的場太夫宅到着し24日は車館太夫に宿泊26日松坂大和屋与兵衛宿泊ヨシ、27日はだ(八太)入口旭屋藤助極ハルシ中喰代50文とあり、27日宿泊した貝戸(垣内)はハルシなど旅籠の良し悪しを記載しています。

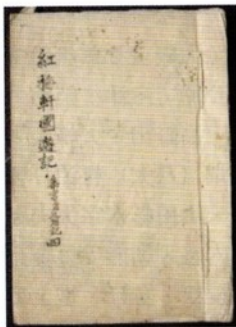
旭屋となっていますが朝日屋の当て字です。この道中日記から過去帳や人別宗旨御改帳よりも30年遡り朝日屋藤助が営業していたのが分かりました。ただ残念な事に評価が「極めて悪し」となっているのは、昼飯50文が食事内容に比べて高かったのか、接客対応が悪かったのか。

2. 過去帳と人別宗旨御改帳に出てくる天保10(1839)年に員弁の医師 松宮周節が息子と伊勢・志摩から大和を旅した『紅梅軒国遊記』がありません。1の「上方・金比羅参詣覚書」と同様に松坂で大和屋与兵衛に宿泊した後、八太で昼食をとったのか、朝日屋藤助の様子を特に詳細に記載されています。

八太当所ハ阿保越大和街道の道並驛場ニして休

泊所も多し朝日屋藤助ハ其外丸屋油や万屋など有朝日屋藤助ハ本家大家二て別亭も数間二分つ、中庭二石灯笼有・・・と記載され30年の間に改善された様です。

この道中日記を知ったいきさつですが、三重教育委員会から発行された『初瀬街道』に松宮周節の道中日記が紹介されました。当時、当医院に勤務していた人見さんにその話をしたら、「私の主人は員弁出身で松宮周節の子孫と同級生であり嫁ぎ先の持光寺に資料が保存されている」とのこと。不思議なご縁で人見さんより持光寺住職 佐藤則雄さんを紹介していただき、貴重な資料をみさせていただきました。(『雲出川』第24号、第25号参照)



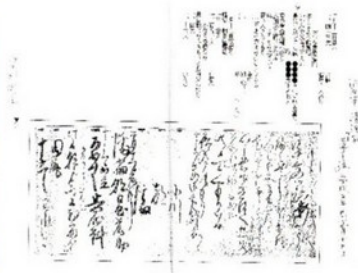
3、嘉永5（1852）年山形より新潟・善光寺・松本・名古屋・佐屋から船で桑名・津・山田三日市太夫宅宿泊・六軒・はた泊り旭屋藤助百二十五文・名張・初瀬・奈良・吉野・和歌山から船で金比羅参り・丸亀から船で岡山・西宮・大阪・伏見・名古屋・小田原・江戸・日光・福島・ゆの原と旅をしています。

この道中日記の表紙は写真で示したように記載年号 嘉永五年・題名 伊勢参宮道中記・筆名 渋谷嘉藤治とあり、本文は覚に始まりすぐに太郎泊りとなっている為、残念ながら何処を何人で出発したのかは不明です。手掛りとしては旅の最後がゆの原で終わっていることです。ホームページでみると七ヶ宿街道についての記載に「福島県の桑折で奥州街道と分かれ、小坂峠を経て上戸沢・下戸沢・渡瀬・関・滑津・峠田・湯原の各宿場を通り、山形県の上山へいたる街道。」とありました。山形県刈田郡七ヶ宿町とわかりました。また往路の新潟までに峠が沢山出てくるなと思っていたら、越後米沢街道十三峠と言われていて、伊達政宗、良寛、イギリス人イザベラ・バードなどが通り、

熊野街道のように「歴史の道百選」「日本風景街道」などに選ばれる歴史のある道とわかりました。



4、安政4（1858）年、磯田屋清七以下9人が群馬県沼田より伊勢参宮・長谷寺参拝と旅して『道中控』を記述しています。この『道中控』に関してはいろいろな方との触れあいで知ることが出来ました。10年前に、三重県立図書館で初瀬街道が記載されている道中日記を調べていると、館員の方より『昔の旅』（小川八千代著）を教えてくださいました。全352頁にわたり伊勢参宮について詳細な調査報告がかかれています。その中にある文政13（1830）年の道中記に六軒から長谷寺へ向かった記載がありました。欲しくなって調べてみましたが絶版になっていたため、恐る恐る著者の小川さんに電話を入れてみると、残部があり、私が調べている初瀬街道が記載されている道中記については「今、群馬県の元新聞記者 湯浅さんに先祖が書かれた道中記の解説を頼まれているが、その中に八太朝日屋藤助がありますよ」と教えていただきました。早速、湯浅さんを紹介して頂き、私の趣旨を伝えると、道中日記のコピーが送られてきました。読んでみると山田の三日市太夫を出発後、新茶屋秋田屋涉右衛門に宿泊し、次の日に雨の中を出立し松坂で昼食して六軒で帰国する3人と別れる。その後、幡宿（八太宿）の朝日屋藤助に150文で宿泊する。かなりの宿なりと記載されていました。



湯浅さんとその後、伊勢参宮のお互いの資料交

換を行いました。湯浅さんは御師の事を知りたいとのことであったので、伊勢でただ一軒存続している御師末裔の丸岡さんを紹介したところ、丸岡さんの祖先が群馬県沼田で真田氏に招かれて御師の分家を作っていたことが判明しました。お互いに喜ばれお二人の親交が深まり、そのことが群馬の新聞に掲載されました。

そのような事があったある日、玄関に見知らぬ方がみえ、群馬の湯浅ですと名乗られ驚きました。「先祖が残した『道中控』に従い2年をかけて群馬より歩いて調査してきました。伊勢では丸岡さんにいろいろ案内して頂き、『道中控』では分からない事を教わってきました。これから青山まで歩くつもりです。飯田さんに連絡するとご迷惑をおかけするし、私一人で歩いて先祖が歩いた道筋を確かめたかったのでアポなしで伺いました」とのことでした。後日『磯田屋清七 安政四年伊勢道中控（先祖と歩いた道中記）』が送られてきました。『道中控』に従い歩いた道筋と解説の1冊と、自分なりに作製されたウォーキングマップと現代の風景写真を1冊と2冊で構成された本でした。

私との出会いや私の自宅も文章と写真で紹介されていました。



宿賃ですが、嘉永5（1852）年山形の道中日記に百二十五文、安政4（1858）年群馬の道中日記は百五十文となっており6年間で25文の値上げをしたのか、または貨幣価値の下落かな？

5, これも三重県立図書館で教えて頂いた本で『伊勢参宮控帳の研究』に湯浅さんの道中記より2年後の安政6（1860）年金比羅近くの香川県三豊郡財田を12人で出発し丸亀より瀬戸内海を船旅して室津へ、陸路を姫路・大坂・高野山・吉野・奈良・柳生街道で笠間・青山越えで八太に。

はたと申す所にて朝日屋藤助と申す物方にて一泊致し候、是より宮川迄八里に御座候。三月

二十一日快光に御座候・・・

伊勢の橋村太夫で御神楽をあげ津・土山・大津・京都・大坂・明石から船旅で丸亀・金比羅参詣し自宅に。

昔の人は1日大体40km歩いたとされているので、天気であれば名張近郊より出発し青山越えで八太か六軒泊まりとなり、伊勢から出発すれば出発時間と天候により松坂・六軒・八太が宿泊する旅籠となります。

興味のある方は、拙著『道中記よりみる八太宿（資料編）』をご覧ください。

6, 時代が変わり、明治8（1875）年の『道中巡行日録簿』は千葉県上総を7人で出発・板橋・高崎・伊香保・草津・善光寺・野尻・笠松・関ヶ原・大津・京都から淀川を船で大阪・大阪より蒸気船で多度津・金比羅参詣・丸亀より船で室津・姫路・高部（神戸）から汽車で大阪・高野山・大峰山・長谷寺・奈良・笠間・名張・畑（八太）村泊り朝日屋藤助料金八銭ナリ・六軒・山田杉木宗太夫紹介の相川屋権六泊り・外宮・内宮・朝熊で萬金丹買う・神社から船旅でみや・浜松・身延・富士参拝・横浜から蒸気機関車で新橋・小網から船で濱村・満正村帰宅。



明治5年に蒸気機関車による新橋横浜開通が開通して、この道中日記にも神戸大阪と横浜新橋を使用しています。また、船旅も大阪多度津を蒸気船で楽しんでいます。当時の引札よりみると外輪船とおもわれます。



明治4年に御師が廃絶となります。御師宅は檀家達の伊勢での宿泊所となっていました。三日市太夫や龍太夫などの多くの檀家を持った御師達は旅館へと生き残りましたが、小さな御師は他の職業へと転業していきました。その為か杉本宗太夫を頼ってきた上総の人達は杉本宗太夫より斡旋された相川屋権六に宿泊しました。

伊勢の旅籠については、『瑞垣』238号「伊勢の旅籠と講社・教会」飯田良樹著を参照してみてください。

3) 朝日屋藤助が掲載された所蔵の定宿帳

定宿帳名(現初瀬街道の掲載道名)	年号	八太旅籠名
神社仏閣真心講(阿保越)	嘉永元年(1848) 戌申とし改	あさひや藤助 まるや定右衛門
神社仏閣真心講(阿保越)	嘉永三年(1850) 六度目改版庚戌	朝日や藤助 丸や定右衛門
神社仏閣真心講(阿保越)	嘉永六年(1853) 七度改版癸丑改	朝日や藤助
万人講版取帳 伊勢・讃岐定宿附	嘉永六年(1853)	あさひや藤助
大船講 日本国中定宿休所	江戸時代?	朝日屋藤助
一新講(ならはせ吉野山)	明治九年(1876)	あさひや藤助 満るや定右衛門
一新講・一新講社(ならはせ吉野山道)	明治十一年(1878) 寅一月改正之証	朝日や藤助
一新講社(大坂からならはせ吉野道)	明治十三年(1880)	あさひや藤助 丸や定右衛門 万や利兵
関東講 御定宿判取兆	江戸時代?	朝日や藤助
武州 関東講(阿をごへ大和道)	江戸時代?	阿さひや藤助
全国道中獨案内図改定宿付	明治十二年(1879)	朝ひや藤助
大川組	江戸時代?	あさひや藤助 まるや定右衛門
浪花講(大和七在 〇順ミち)	江戸時代?	朝日や藤助
浪花講(大坂から奈良はせいせ道)	明治三年(1870)	阿さひや藤助

伊勢御師御定宿繁栄講	江戸時代?	朝日屋藤助
定宿附	江戸時代?	朝日屋藤助 〇屋八右衛門
道中獨案内定宿附	江戸時代?	朝日や藤助 丸や定右衛門
道中獨案内定宿附	江戸時代?	朝日や藤助 丸や定右衛門 万や利兵
諸国案内獨案内	明治時代	朝日屋藤助

朝日屋藤助記載以外の所蔵の定宿帳

江戸時代

定宿帳名	年号	八太宿名
十草講	明和九年	問や
相続講	文化元年	万や
相続講	文化七年	江戸屋
繁栄講	安政三年	丸屋
浪花講	安政二年	万や
浪華組	天保七年	万や
大江講	嘉永元年	丸屋
東講定宿帳	安政六年	万屋
月参講	江戸時代	丸や
金月参講	江戸時代	丸や
神楽講	江戸時代	油や
大峰山上末広組	江戸時代?	
灯籠講	江戸時代?	よろづや
大峰講	江戸時代	万屋

明治時代

定宿帳名	年号	八太宿名
真誠講	明治時代	みきや
真誠講	明治20年	(伊勢本街道)
浪花講・真誠講	明治14年	
真誠講・三都講	明治時代	まるや
真誠講 神風講	明治18年	(大和街道)
東国組	明治14年	
新諸国道中記	明治14年	
大日本道中記	明治11年	万屋
共同組	明治時代	(伊勢街道)
信州善光寺参拝 攝取講	明治時代?	三木屋
常葉講社	明治19年	万や
栄世講	明治6年	万屋

祇神組	明治時代	よろずや
文明講	明治7年	(伊勢街道)
御師講社	明治34年	(伊勢街道)
一新講	明治6年	
一新講社	明治13年	萬屋
一新講社・神風講社	明治14年	
一新講社	明治19年	万や
一新講社	明治29年	角や
神風講社	明治時代	(東海道)
神風講社第1359番 日丸日参組	明治13年	万や
神風講社第905番 佐保講	明治時代	万や
神風講社第159号 松竹梅	明治12年 一枚物	まるや
神宮教会第32番 嘉永組	明治9年改 (安永7年開)	万や



定宿帳をみても、江戸中期以降に発行されているのは（江戸初期からあったかもわからないが文献的に不明）、**仲間内で講を組み**、道中をするうえで信用のおける宿を宿場ごとに選んで安全に旅が出来るようにしています。仲間内の講を組まないでも旅の安全な宿を紹介しようとする**旅籠組合的な講**の動きが出てきて、大坂の松尾甚四郎と江戸の鍋屋甚八が講元となり甚四郎の手代松屋源助が发起人となり文化元(1804)年に浪華組(後の浪花講)が出来ました。宿屋には浪華組の規定を設け、宿内で賭博しない、また遊女を置かない

などの義務付けをしました。旅行者は浪華組が作製した定宿帳を持って指定の安全な宿に宿泊出来たので好評で、その後、三都講や関東講などの類似の講が出来てきました。

仲間内で講を組み作製した定宿帳と旅籠組合的な定宿帳で奈良より伊勢までの街道使用を経時的に見ていくと、文政(1820年)頃までは、奈良榛原よりかい坂越えて田丸まで街道が一直線で距離が短いことから伊勢本街道が主流でしたが、伊勢本街道より距離もあります平坦で宿場が整い出した青山越え(初瀬街道)を主流に掲載する定宿帳が出てきました。

文政より50年も昔の明和9(1772)年に本居宣長が吉野山へ花見を兼ねて吉野水分神社参拝する『菅笠日記』があります。松坂を出発した関係から青山越えて吉野に向かいましたが、帰路は榛原で弟子達がかい坂越えは険しくてと諫めるも、来た道とは違う道をと、かい坂越えを敢行しますが雨に降られて大変な旅となっていました。旅の終わりにさしかかった峠より見渡せる尾張三河の山々や伊勢湾の美しさに感動して旅の疲れが吹き飛んだとかいています。

かい坂を選んで伊勢を目指した旅人もそのような心境でしたでしょう。

話を定宿帳に戻すと、八太宿にある朝日屋藤助が記載されている定宿帳は文政以降に作成されているものが多いです。

私が収集した年号が記載された定宿帳でみると、明和9(1772)年十草講が一番古いですが、やはり伊勢本街道が先に掲載されています。ちなみに八太宿は問屋八左衛門になっていました。朝日屋藤助が掲載された定宿帳は嘉永元(1848)年の小俣宿屋小林十兵衛が作製した真心講が一番古い定宿帳です。嘉永6年二本木の丁子屋治兵衛門(現在の味噌醤油製造販売丁子屋商店)が作製した万人講、年代は不明ですが、江戸時代には岐阜岩村の大船屋新六が出した大船講、大阪平野屋佐吉の関東講、やはり大阪の河内屋卯助が出した大川組など旅籠が同業者達を引き入れて定宿帳を作製しています。

明治時代になると浪花講のようなツーリスト的に営業目的で作られた静岡の一新講(明治6年)や現在の「日通」前身である真誠講(明治5年)、主旨は違いますが、明治6年に神宮教会が今まで

あった地方伊勢講を組織化した神風講社（会社組織で社長を置く）などが出てきます。

朝日屋藤助は定宿帳に出てくる八太宿の丸屋定右衛門・万屋利兵衛・三木屋定治郎・角屋才三郎などと競合しながら掲載されています。

4) 朝日屋藤助は何時まで営業していたのか？

道中日記からは明治8（1875）年、定宿帳からは明治13（1880）年の一新講社が収集した最後です。

明治23（1890）年になると、亀山まで省線（国鉄）敷かれ、明治24年津、明治26年松阪・宮川、明治30年山田と延び旅の様子が変化して街道筋の旅籠が省線に泊まり客を奪われて閉めていきます。

他の郷土史資料よりみると先見の明があったのか、明治20年以前に旅籠をたたみ、農業を主に営んでいた模様です。

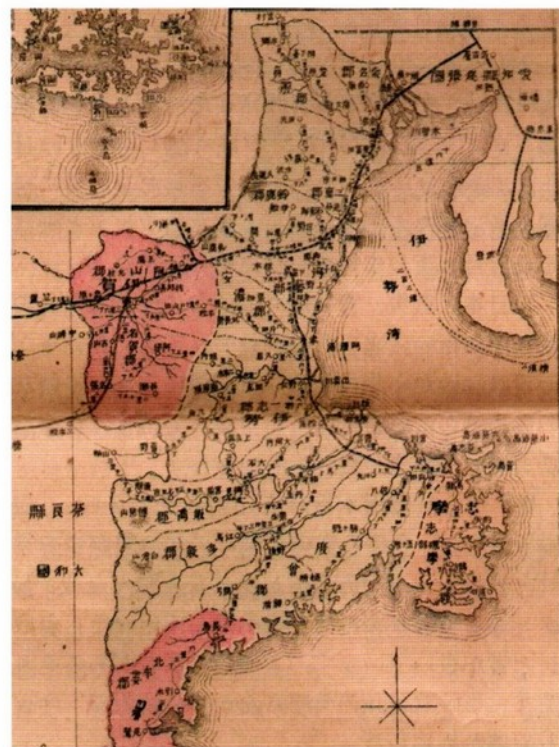
5) まとめ

定宿帳は宿場の宿名が記載され、当時の旅籠名がわかりますが、宿場の様子は道中日記の方が勝っています。でも収集した道中日記は講より選別や旅費を貰っている関係からか、現金出納帳のように金額のみで状況記載が少ない道中日記がほとんどでした。

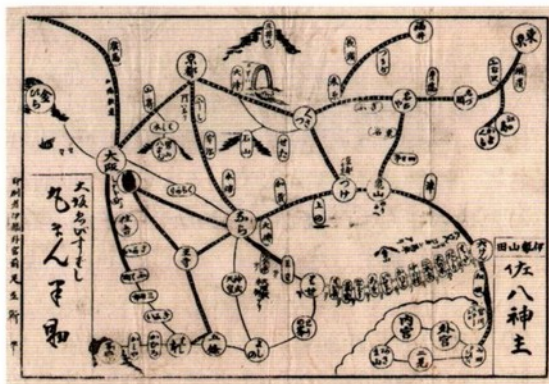
磯田道史氏の『武士の家計簿』のように金額を記載された道中日記より、何かヒントが得られないかと無い知恵を絞ってしています。



東海道鉄道旅行獨案内の一部 明治23年



三重県管内全図の一部 明治33年



伊勢山田佐八神主と大坂丸まん半助の引き札
(明治後期)